

本と暮らした日々

大橋賢裕 専任講師

(ミクロ経済学I)

本が好きだ。読むことはもちろん、集めることや、ズラリと並んだ背表紙を眺めることも好きだ。そのせいか、蔵書数は増えるばかり。将来が心配だ。そこで私は、工務店さんに依頼して、自宅のクローゼットを書庫に改造してもらった。さらに大学の研究室には、棚1段あたり200Kgの重さに耐えうるという業務用専門棚を自腹で設置した。

蔵書が爆発的に増えたのは、神田神保町の古本街に足を運ぶようになってからだ。ちょうど西暦2010年の頃である。私は大学院を修了し、研究者として職を得たばかりだった。当時は文京区に住んでおり、勤め先は日本橋にあった。のんびりしていた私は、住まいから勤め先まで、徒歩で1時間かけて通っていた。東京ドームを抜けて「ニチケイ」本館の前まで来たら、白山通りをまっすぐ歩いて、神保町を通過していく。だが時々、靖国通り交差点あたりで、仕事に行きたくない気持ちに襲われる。そんなときはそのまま神保町にとどまり、古書店で時間をつぶすという塩梅だった。(仕事はさぼった。)

当時の私は、日本と中国の古典文学や歴史書に大いにハマっていた。「新日本古典文学大系」や「新釈漢文大系」といったシリーズの本が、神保町近辺の古書店では新刊価格の半値以下で売られていて、心は狂喜乱舞だった。「奇貨居くべし」とつぶやいては、ほかの様々なジャンルの本まで買い漁った。アルフレート・アインシュタインの『モーツァルト』や、ジョン・フォン・ノイマンの『自己増殖オートマトンの理論』といった稀少な絶版本も、このとき安く手に入れた。2号館の向かいの「日本書房」でもよく買った。都内R大に務める経済学者の友人には、「安く買えて『消費者余剰』がっぼり稼いだけ！」と、得意満面によく伝えていた。そんなとき彼は決まって「どんだけ奇貨居いてんだよ！」と、あきれ顔で笑うのだった。(行動経済学ではこんな気持ちを「取引効用」と呼びます。)

仕事に関係のある本は、公費で買える。だが私は、たとえ公費で買える本でも、一所懸命に読みたいと思うものは自腹で買っている。故・渡部昇一先生も、ご自身の著書『知的生活の方法』(講談社現代新書)において、読書を食事に喩えたうえで、「身銭を切っておれば、まずいかうまいかについての判断もきびしくなるう」(p. 71)とおっしゃっている。蓋し名言。行動経済学でいう「心理^{メンタル}会計」を先取りしたご意見だ。

旅行に行くと必ず、その土地の書店に足を運ぶ。フィンランドでは、映画『かもめ食堂』にも登場した有名なアカデミア書店に行き、アルバ・アアルトの作品集を買った。アカデミ

ア書店は、日本のビル型大型書店と異なり、売場が2階までしかない。そのぶん店内が一望できる設計になっていて、たいへん美しい。日本の書店や図書館の設計には、こういう美的感覚が欠けているように思えてならない。台湾では、誠品書店に行った。TIME Asia 誌の「アジアで最も優れた書店」に選ばれたこともある有名店だ。そこで私は、ホンモノの中国古典を心ゆくまで物色した。そのときは、台湾商務印書館発行の『論語』と『晏子春秋』の注釈本を買った。もっとも、私は中国語が読めないのであるが・・・。

時代は令和になった。元号の由来が『万葉集』にあると話題になった。私は、かつて神保町の古書店で買った『万葉集』をスッと本棚から取り出し、サッと調べることができた。知識はいつ必要になるかわからない。本を買うことは、備えであると同時に、「すぐに」「正確な」情報にアクセスできる安心感を買うことでもある。たとえ読めなくても、堂々と買えばいい。いつかきっと役に立つ時が来るのだから。そう自分に言い聞かせながら、私は今もせっせと本の蒐集に励んでいる。